



Evaluating mucosal healing using colon capsule endoscopy predicts outcome in patients with ulcerative colitis in clinical remission

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2020-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 亮佑 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003676

論文審査の結果の要旨

潰瘍性大腸炎（UC）は、再燃寛解を繰り返す炎症性腸疾患であり、本疾患の活動性を評価し、再燃・予後を予測する上で内視鏡検査は欠かすことのできない検査となっている。しかし、従来の大腸内視鏡検査（CS）は、少なからず苦痛を伴うことから、より低侵襲的で簡便な検査の開発が望まれている。大腸カプセル内視鏡検査（CCE）は、近年、非侵襲的に腸管全体像を観察できる新たなモダリティとして開発された。しかし、UC などの炎症性腸疾患において、国際的に推奨される前処置は多くの日本人は許容できず、さらに CCE で評価される活動性スコアの臨床的意義はまだ十分確立していない。そこで申請者は、寛解期 UC 患者を対象として、従来の前処置の負担を軽減した前処置軽減レジメンの有用性と、CCE による粘膜炎症活動性評価と UC 再燃との関連性について検討を行った。

臨床的寛解 UC 患者 30 名を対象に CCE を実施し、前処置軽減レジメン（前日に Magnesium citrate 50 g/180 mL、Sennoside 48 mg を内服し、当日はブースタとして低用量 Polyethylene glycol を適宜内服）で前処置を行い、全大腸観察率、大腸通過時間、洗浄度などを評価した。また、CCE による粘膜炎症活動性評価は、Mayo 内視鏡スコア（MES）と潰瘍性大腸炎内視鏡的重症度インデックス（UCEIS）を用い、再燃との関連を検討した。まず、前処置軽減レジメンの評価においては、全大腸観察率、大腸通過時間、洗浄度のいずれも良好であり、従来の前処置法と遜色なく、忍容性も高かった。また、CCE における MES や UCEIS を用いた粘膜炎症活動性評価スコアは、UC の再燃や増悪と有意に関連した。

以上より、申請者は、日本人の寛解期 UC 患者の CCE において、前処置軽減レジメンの有用性と、さらに CCE の粘膜炎症評価が再燃・増悪を予測しうることを示した。

本研究は、現在、適応が拡大されつつある CCE に関して、UC 患者における適切な前処置方法を示し、さらに CCE による粘膜炎症活動性評価の臨床的意義を明らかにした研究として審査委員会では高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 須田 隆文

副査 岩下 寿秀

副査 竹内 裕也